

世にわたるものであり、しかもこの仏身義は諸經に不説である、その超勝性を叙べられたのである。すなわち円の三身如来は諸經に開顯されないものであり、この寿量品の仏こそ、一切の諸仏を超越する絶対性を具備された仏という解釈ができるであろう。

このように、聖人における天台・妙楽の釈文の引意を探ることによって、聖人が両者の仏身義・寿量品仏義を継承されたのではないか、という推測を可能にしたと思う。つまり、日蓮聖人における寿量品の仏とは、久遠実成にして三身円満具足の釈尊であったことが、確認できたように思う。ここに聖人は、諸宗からの法華經の教主への論難に対する立場を明確化されると同時に、諸宗本尊義の誤謬を指摘されたものと考えるのである。

また、聖人の仏身觀は、中古天台義から導出される理本覺的無作三身觀ではなく、中国の天台・妙楽の仏身觀たる本地三身、円の三身義の系譜に位置していたことを銘記したい。そして、この点にも、日蓮聖人における正統天台・原始天台志向への一面を垣間みることできょう。

なお、詳細については、『大崎学報』第一二九号所収の拙稿「日蓮聖人における『寿量品の仏』について」を

参照されたい。

## 日蓮聖人の具足論

庵 谷 行 亨

『観心本尊抄』受持譲与段は我等と五字の必然關係を受持・自然譲与という表現の中で、その本質を定義づけられたものと考えられよう。ところが『観心本尊抄』は「五字の受持」という直截的表現を示され、その説明は全く見られない。第二十番の問文は、凡心所具の仏界についての会通を糺したのに対し、答文は三經四疏を挙げて自然・具足の義を間接的に示されたにすぎない。以下いきなり受持譲与段へと筆を運ばれている。ここには「五字」および「五字の受持」についての論理的説明が省略されていると見なければならぬ。その省略が即ち『観心本尊抄』にいたる諸遺文の具足論であろうと思われるのである。以上の問題提起に従って信頼される諸遺文を検討し、『観心本尊抄』受持譲与段にいたる五字超越論・絶対論を、具足論の課題のもとに考察してみたい。

『観心本尊抄』にいたる諸遺文の具足論はほぼ次の通りである。

①十界互具論、②十界互具妙法論、③法華經十界互具論、④一念三千根底十界互具、⑤一念三千、⑥一念三千妙法論、⑦一念三千具足論、⑧一念三千成仏論、⑨本門一念三千論、⑩本門文底一念三千、⑪一念三千仏因論、⑫一念三千功德論、⑬縦横一念三千、⑭妙字具足論、⑮妙字功德論、⑯妙法具足論、⑰妙字受持功德論、⑱相絶二妙論、⑲法華經仏因論、⑳法華經超勝論㉑法華經具足論、㉒法華經功德論（成仏論）、㉓法華經一句一偈具足論、㉔法華經一句一偈功德論、㉕唱題功德論、㉖題目具足論、㉗開名功德論、㉘仏種、㉙種子一念三千、㉚信心浄土論（仏国論）、㉛信心功德論（譲与論・成仏論）、㉜受難成仏論、㉝凡身即釈迦論

①②③の十界互具論と⑤⑥⑦の一念三千論は仁治から正元年間にかけての、比較的初期の段階の遺文にみられる。いずれも台家の教理の中で法華教学を披瀝されたもので、それが法華・真言あるいは法華・涅槃等の超勝性の論証を目的とされたものではあっても、これがやがて文永八年以降の聖人教学を形成する重要な論理的基盤と

なっていることは言うまでもない。④および⑧⑩に至る十界互具を根底とした本門一念三千論の展開がそれである。この本門一念三千へ至る過程の中に、法華經具足論・法華經功德論と関連しつつ本門思想の問題が指摘されるのである。聖人の本門思想は文永二年の『薬王品得意抄』あたりから、同七年系年の『小乗小仏要文』、同八年の『十章抄』、同九年の『開目抄』にかけて確立するものとみなすことができよう。台家の教理である十界互具・一念三千論が、特に文永八年以降の段階において迹門・理と規定されるのと相俟って、聖人独自の教学が本門十界互具一念三千として確立されるのであるが、中でも文永九年の『開目抄』は『観心本尊抄』教学に最も接近し、前述の如き意味において、『観心本尊抄』の論理の飛躍を援証するものであると考えられる。④一念三千根底十界互具及び⑩本門文底一念三千はその最もよい例といえよう。

⑭と⑮は「妙」に具足の義を認め、そのゆえに功德の絶大なることを示されたものである。妙字の意味内容については諸遺文において天台・章安・妙楽等の釈によって、開・薩・具・円満・蘇生・絶と釈され、これが『開目抄』において、薩即具足・沙即六・六即具足・薩即沙

・薩即六・薩即正・正即妙・妙即具足・六即六度万行・具即十界互具・足即滿足と集中的に表記されるにいたる。<sup>16</sup>～<sup>18</sup>もこのような妙字具足論の展開の中に位置づけられる。

<sup>19</sup>～<sup>20</sup>は法華經超勝の論証とそれに必然的にともなう法華經功德の甚大さを示されるものである。

<sup>23</sup>・<sup>24</sup>・<sup>27</sup>は法華經功德論の一環にありつつ、<sup>14</sup>～<sup>17</sup>とともに<sup>25</sup>・<sup>26</sup>の題目具足論・唱題功德論を導出する重要な役割を持つものと考えられる。即ち<sup>14</sup>～<sup>24</sup>及び<sup>27</sup>は陀羅尼品等の經証と共に、五字・七字の具足義の論証と功德の超絶を証するものであるといえる。唱題の問題は正元年間からみられるのであるが、それに先行する妙字功德論・妙字具足論はすでに題目功德・唱題論証の伏線となっているとみることができよう。

<sup>28</sup>仏種は、『開目抄』に至るまではおもに謗法・三毒・五逆等に関連して述べられ、仏からの能動によるものではなく、衆生の惡業・惡行に備わるといふ凡夫救済の論理となっている。十界互具・一念三千が教理の展開として、珠・成仏という救済論となり、法華經・題目が超越性や具足義に立脚し、功德甚大を証することによって救済論を示すに對し、仏種は逆説的論理をもつて直接罪惡

深入の衆生に救済の道を示している。

以上、『観心本尊抄』に至るまでの聖人の具足論の概観を述べた。概して、<sup>1</sup>～<sup>13</sup>は教と仏との論理的関連において五字と仏界の絶対価値が証される。<sup>14</sup>～<sup>24</sup>と<sup>28</sup>・<sup>29</sup>は教の功德の超越性と絶対性が証され、ここから五字が導出される。<sup>25</sup>・<sup>27</sup>と<sup>30</sup>～<sup>32</sup>は、信仰者が絶対的功德体である五字をいかに主体的に受けとめるかという問題である。かくして五字の超越性・絶対性の論証と信の必要性が論証されるに至るのである。

## 覚知道と還愚道

本 間 裕 史

日蓮聖人と法然上人との比較研究についての考察は、既に多くの諸先師によって試みられているところである。一般に、鎌倉仏教と呼称される時代的特徴の一つを挙げれば、諸宗の祖師それぞれに持つ末法認識及びその仏教的超克の種々相が、この新仏教形成の背景に有ったと見ることが出来る。そこで、日蓮聖人と法然上人とが